

「菅原道真仮託家集」 E系統本について

—— 構成と配列に関する問題 ——

山口 正代

はじめに

「菅原道真仮託家集」 E系統本は、簡単に言うくと、巻軸歌が違うため二種類に分類されている。歌数は228首から371首まであり、その差、最大で143首である。しかし、実際にE系統本の内容を検討してみると、巻軸歌、歌数の違いだけではない、複雑な編集の実態が見えてくるのである。本稿ではE系統本の構成と配列に関する問題を取り上げ、道真仮託家集形成過程の一端を解明してみたい。

一 E系統本とは

E系統本とはどのような本を指すのか、整理しておく。巻頭歌は「梅花へにの色にそいたりけるあねかかほにもつくへかりけり」（「あねか」が「あこか」になっている等、その他にも異同がある）、この歌でE系統本は始まるのだが、巻軸歌が違うため、武井和人氏によつ

て次のように分類されている。巻軸 a、

日となりて国土を照す我なればねかはん人の袖に
やとらん

を持つ本（以下「E— a」と略す）と、巻軸 b、

きくやいかにはの空なる風たにも松に音するな
らひ有とは

はへぬ 此哥は北野の御りしやうなるゆへに御詠にく

を持つ本（以下「E— b」と略す）である。

では道真仮託家集E系統本を、武井氏の紹介順を基準にした上で歌数の多い順に並べてみよう。現在報告されているE系統本はE— aが七本、E— bが二本、全部で九本である。図書番号、奥書等のあるものは記す。○付きの番号は武井氏著書においての番号である。²⁾

E— a

（1）陽明文庫蔵「菅家御詠」（以下「陽明文庫本」と略す）〔二四七・七〕「資料館」マイクロ〔五五

— 四五— 一〕紙焼〔C二六四九〕【371首】①

〔2〕宮内庁書陵部蔵「菅家御詠」（以下「書陵部本

A」と略す）〔五〇一・五〇〕「資料館」マイクロ

〔二〇一・二三一・一九〕【371首】④

〔3〕宮内庁書陵部蔵「菅家御詠」（以下「書陵部本

B」と略す）〔五〇一・二五二〕「資料館」マイクロ

〔二〇一・二四一・一七〕【371首】⑤

此一冊ハ竹内良恕二品親王之自筆以本写之畢

寛永十一年卯月七日（花押）

〔4〕宮内庁書陵部蔵「菅家御詠」（以下「書陵部本

C」と略す）〔二五三・二一四〕「資料館」マイクロ

〔二〇一・三六一・二二〕【371首】⑥

〔5〕静嘉堂文庫蔵「菅家御集」（以下「静嘉堂文庫

本」と略す）〔五〇三・一〇・二〇・二三二〕【371首】

⑦（後略：「十二時御詠」他あり）

〔6〕学習院大学附属図書館蔵「菅家御集」（以下

「学習院大本」と略す）〔三一五・四八七〕【370首】

③

以圖書寮本菅家御集校訂焉与本書全同一也

圖書寮本以下無之又無奥書桂宮本也

昭和十七年七月一日於研究室校訂了

岸迺舎（中略：他の道真仮託家集収録歌あり）

「菅家御詠百首和歌」が合本。

菅家御集一卷以山岸文庫本書写者也

件本以圖書寮本菅家御集（二五三ノ二二四）校

訂者而、歌數最多矣

昭和十七年八月上流記之

〔7〕河野美術館蔵「菅家御詠」（以下「河野本」と

略す）〔三四七・八四四〕「資料館」マイクロ〔七

三―三五八―五〕紙焼〔C九一六二〕【368首】②

明治十四年一月十八日歌御會始

竹有佳色

御製

うゑおきし庭の吳竹よゝをへてかはらぬ色のた

のもしき哉

皇后宮御歌

一品幟

E—b

〔1〕神宮文庫蔵「聖廟御詠」（以下「神宮文庫本」

と略す）〔三・一二五三〕「資料館」マイクロ〔三

四―一三九―九〕紙焼〔C四六八五〕三本の「聖

廟御詠」が合本、その二本目。【228首】⑧

〔2〕岡山大学附属図書館池田家文庫本蔵「聖廟和

歌」下所収「聖廟御詠」（以下「岡山大学池田家

文庫本」と略す）〔九一・一・三〇〕【資料館】

マイクロ〔二二―一五―二〕二本の「聖廟御詠」

が合本、その一本目。【228首】⑨

E系統本は九本とも部立はない。奥書は書陵部本B、

学習院大本にある。河野本は歌会始のことを記してい

る。学習院大本の奥書についてはその内容を検討しな

ければならないが、これについては別の機会に見てい

くことにしよう。

では歌数に違いのあるE— a について確認しておこう。なお和歌の引用は、E— a は書陵部本A、E— b は神宮文庫本を用い、この二本を基準にし、必要に応じて各諸本より引用する。また集付け、異文注記等、本文以外のこととは省略する。以下この方針に従う。

E— a は、基本歌数は371首と考えてよいであろう。学習院大本は歌数370首であるが、これは学習院大本の番号321「人そなきなかめし月はめぐりきてむかし恋しき蓬生のやと」と、同322「なきぬらす袖にはいかゝ宿すへきくもりならはぬ秋のよの月」との間に、書陵部本Aの歌番号でいうと、³²²「面影のせめては月におもふさへ涙にかはるちきりなりけり」が見えないためである。³²¹河野本については、歌数368首であるが、これは河野本の歌番号172「今こんとたのめをきてしふるさとしらてや人のわれをまつらん」の歌と、同173「きるつめにかへしかたなや有つらんわかおもふことのみまたかなはぬ」の歌との間に、他本にはある三首が見えないためである。その三首は、書陵部本Aでいうと、歌番号173、174、175に該当する。

173 日をへつゝゆけははるけき道なれと末を都とおも

はましかは

174 みなし子にそふものとは君はかりあはれみたま

へみすの隙より

175 しのはふとは誰かいつはりのことのはそけにおもふ

にはつゝまれもせず

ただし河野本の場合は、172「今こんと」の歌と173「きるつめに」の歌との間が三分空けてあり、つまり空欄にしてあると言ったほうが適切かもしれない。編纂者もしくは書写者がここに三首あるということがわかつてはいたものの、その時は書き入れることができず、後で記入しようと考えたのであろうか。

二 E— b と E— a の前半部分との関係

では、E— a (基本歌数371首)とE— b (歌数228首)との違いは何であろうか。簡単に言えば、ここまで見てきたとおり、巻軸歌と歌数の違いであるのだが、もう少し内容を比較してみよう。E— a とE— b との共通部分は、いわゆるE— a の前半部分、書陵部本Aの歌番号でいうと1〜207番までと、E— b の全部すなわち神宮文庫本の歌番号1〜228番までと言つてよい。つまり、E— b 神宮文庫本の巻軸歌228「きくやいかにうはの空なる風たにも松に音するならひ有とは」が、E— a 書陵部本Aの207番歌に該当するのである。したがって、まずE— b とE— a の前半部分との関係を、歌数の違い等も含めて考えていかなければならない。

E— b (歌数228首)には、E— a の前半部分(歌数207首)には見えない歌が二四首見える。E— b が、E— a の前半部分より二一首多いのは、この二四首があり、三

首少ないためである。ではE—bにおいて見えない三首を見てみよう。書陵部本Aの歌番号でいうと99、156、206番である。

99 やま河の氷のうへにけさおちてぬれぬこのはそ風
になかる、

156 心たにまことの道にかなひなはいのらすとても神
はまもらん

206 久かたの中よりおふる蓮葉を (アバ) にこりといひ
やはてなむ

E系統本については、第一節でも述べたが部立がない。確かに春部、夏部等は書かれていないのであるが、共通部分であるE—bとE—aの前半部分については、ほぼ春、夏、秋、冬、雑(雑の一部には恋の歌に分類してもよいのではないかと思われるものも含まれている)のまとまりで収録されている。

E—bとE—aの前半部分の歌の配列については、先に述べたように見える歌、見えない歌、一部入れかわっている箇所があることを除けば、配列はほぼ同じと考えてよい。しかしおそらく錯簡が原因で生じたと思われる、歌の配列が大きく入れかわっている箇所がある。表に示した記号で整理しながら確認してみよう(別表1)。E—b 178 「よしや我」の歌とE—a 160 「よしや我」の歌、ここまでは歌の順番がほぼ同じである。しかし、次の歌が示すように、E—bの179は「白雲の八重たつ方を」●の歌になり、E—aの161は「かめか澗」

▼の歌になる。×はE—bにはあるが、E—aにはない歌である。E—bは179 「白雲の八重たつ方を」●、198 「池の心」○となり、199 「かめか澗」▼、218 「おもひわひ」▽となる。ではE—aはどうかというところ、161 「かめか澗」▼、180 「おもひわひ」▽となり、181 「しら雲のやへたつかたを」●、197 「池心」○となる。そして、E—b 219 「吹風は」◆の歌、E—a 198 「吹風は」◆の歌で配列が一致する。つまり両者のこの部分の配列を簡略して示すと、E—bは●○▼▽◆であり、E—aは▼▽◆●○となる。E—bとE—aとでは綴じ間違いで入れかわっていることがわかる。

ではE—bとE—aどちらの配列が正しいのであろうか。この問題に関しては、第三節の後半で取り上げることにしてしよう。

次にE—aの後半部分(書陵部本Aの歌番号でいうと208、371番)はいったい何なのかという問題が残る。E—aの後半部分の最初の歌すなわち208番歌は、

しほかまの煙に春はさそはれて年のうちよりかす
む空かな

であり、E—aの最後の歌すなわち巻軸歌は先に示したように「日となりて」の歌である。すなわちE—aの後半部分の一六四首という歌の数は、一本の家集と見なすことも可能であり、ここも部立はないが、ほぼ春、夏、秋、冬、雑の順に並んでいて、ますます家集の存在を思わせる。しかし今のところE—aの後半部分に該

当する家集を見つけることはできていない。ただしE— aの特色としては、二つの種類の本が合わさったようなかたちになっているということは言つてよいであらう。E— aの後半部分については今後の課題としたい。

三 B系統本との関連

道真仮託家集の中で最も歌数が多いのは、五七〇首の歌を収録しているB系統本である。言い換えれば、B系統本は、道真に仮託した歌を網羅しているものに最も近い本と言つてよいであらう。ではE系統本との関連、特に今問題にしているE— aの前半部分やE— bとの関連はないのであろうか。

稿者は以前、B系統本を甲、乙、丙の三種類に分類したことがあり、それをさらに甲a、甲b、乙a、乙b、丙の五種類に細かく分けたことがある。⁽⁵⁾ここではそのときの分類に従い、甲bが歌数五七〇首で最も多いので、現在確認できる甲b五本の中の一本である河野美術館蔵「聖廟御詠」〔三四六・八三九〕「資料館」マイクロー〔七三—三五四—四〕紙焼〔C九一二七〕と比較してみたい。河野美術館蔵「聖廟御詠」については、E系統本にも河野本があり、紛らわしいため、またB系統甲bの代表という意味もあつて、以下「B系統甲b」と記す。B系統甲bは五つのままとまり〔1〕〜〔5〕を確認でき

る。次はB系統甲bの構成を簡単に示したものである。

〔1〕

聖廟御詠

春部 110首

(1)

夏部 29首

(111)

秋の部 108首

(140)

冬部 35首

(248)

恋部 31首

(314)

雑部 156首

(469)

(中略)

〔2〕

御詠廿五首今河殿

依夢想掘出歌也

25首 (470)

(494)

(中略)

〔3〕

天神様御作十二時之御詠

12首 (495)

(506)

(中略)

〔4〕

聖廟御詠

32首 (507～538)

(5)

聖廟御詠

春部

7首 (539～545)

奥二

24首 (546～569)

明應九年三月二日大雨の夜

世間門くゝに書し哥

1首 (570)

ではEーb、Eーaの前半部分、B系統甲bとを歌番号で比較してみよう(別表2)。上から、Eーb、Eーaの前半部分、B系統甲bの歌番号である。Eーbはほぼ春・夏・秋・冬・雑の順に配列されているので、Eーbには実際には記されていないが、部立を示した。Eーb(歌数228首)を中心に見ていくと、春44首、夏6首、秋56首、冬7首、雑115首である。×はその歌がないこと、※はB系統甲bにおいて連続であること、*はB系統甲bの歌の左注にあたる箇所(聖廟御詠)の歌(B系統甲bの歌番号でいうと507～538)を指す。▲は部立のあるB系統甲bの構成(1)において、歌が置かれていない箇所を示す(E系統本とは違う部立のところ)に置かれてい

る場合のみ)。

Eーb(歌数は228首)とEーaの前半部分(歌数は207首)、両者は、B系統甲bでいうと、ほぼ(1)と(4)の歌に該当する(5)に一部重出歌あり)。Eーbを中心にみていくと、B系統甲bの歌が連続である箇所(※)が二十九箇所ある。別表2から、EーbとEーaの前半部分とでぴったり重なる箇所(通し番号を□で囲む)、Eーbにはあるが、Eーaとは一部異なるか、もしくはEーaには見えない箇所(通し番号を□で囲み反転させる)を抜き出して見よう。上から順に□■は通し番号、Eーbの歌番号、(B系統甲bの歌番号)である。

| | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------------------------|-----------|-----------|--------------------------|-----------|-----------------------------|-----------|-------------------------|-----------|----------|----------|----------|----------|---|
| 25 | 23 | 21 | 19 | 17 | 15 | 13 | 11 | 9 | 7 | 5 | 3 | 1 | |
| 19817115513612310495 | 80 | 64 | 33 | 26 | 11 | 1 | 19917215613712410696 | 81 | 66 | 34 | 27 | 12 | 2 |
| 532387396401316165148205200 | 49 | 47 | 30 | 14 | 533388397402317167149206202 | 50 | 48 | 31 | 15 | | | | |
| 26 | 24 | 22 | 20 | 18 | 16 | 14 | 12 | 10 | 8 | 6 | 4 | 2 | |
| 20219215914312911199 | 88 | 74 | 55 | 28 | 22 | 3 | 20319316014513011310094 | 75 | 57 | 29 | 23 | 7 | |
| 385530524520517261150140158197509 | 16 | 39 | 386531525522518263151146 | * | 199510 | 17 | 43 | | | | | | |

221208 (27) (28) 215 (377) 217 (379) 223209 (535375) (537376) (537)

E—bとB系統甲bとが影響関係にあることは、明らかである。またE—bとE—aの前半部分とでは、**2** (八箇所)からわかるように、E—bのほうが、B

系統甲bとの影響関係が少し強いということがわかる。E—bが、B系統甲bもしくはその前段階のようなものを見た可能性があると考えた場合、三通り考えられる。まず一番目はB系統甲bとして現在読むことができる、構成「1」→「5」を持つ本があったが、E—bの編集作業の際に、「1」と「4」から歌を収録した二番目は「2」「3」「5」のいずれかが欠けている本(たとえば「2」はあったが、「3」「5」はないというような本があったとしても不思議ではなく、組み合わせが考えられる)があり、結果として「1」「4」から収録した。三番目は「2」「3」「5」がなく、「1」「4」から成り立っている本を見て編集作業を行ったということである。

「2」「御詠廿五首」と「3」「天神様御作十二時之御詠」が、そのタイトルからもわかるように、「1」春・夏・秋・冬・恋・雑や「4」「聖廟御詠」(歌数は32首と少ないが、ひとまとまりの家集のようなもの)と比べて、やや特別であるような印象を受ける。つまり「2」は25首、「3」は12首そろうことで意味をなすということも考えられ、そこから歌を何首か選ぶという作業は、「1」

「4」から歌を選ぶ時よりも、多少迷いが生じるかもしれない。たとえば、静嘉堂文庫本、学習院大本に見えることであるが、両者は付属のようなかたちで、後ろに「十二時御詠」を載せている。しかし、「4」「聖廟御詠」があつて、「5」「聖廟御詠」がなければ別であるが、「4」から収録して「5」からほとんど収録していないというのは何を意味しているのであるうか。「5」は「4」とくらべて構成が少し複雑ではあるが、家集の体裁のようなことで言えば、たいした違いはない。

先に見たように、◎の付いているものは、「4」から収録した歌を示している。特にE—bを中心に◎の付いている歌を見ていくと、飛び飛びではあるが、508、509、510、511、……538というようにほぼ、順番どおりに収録されていることがわかる。これは少なくとも「1」と「4」はやはり分けられていて、そこから収録したことを示しているのではないだろうか。

◎について、特にE—bと断つた理由は、ここで第二節で取り上げた錯簡の問題も関連してくるからである。別表2で見えていくと、問題になる箇所は、E—bの番号179→218である。E—bもE—aの前半部分も、B系統甲bの影響を受けているのであるが、E—bの歌番号179→218の箇所、この◎の部分を追っていくと、527、528、179→218の箇所、533、534と順番どおりになる。しかし、E—aの場合、同じ箇所が、533、534→527、528→532と入れかわる。E—bとE—aの配列、どちらが正しいのかという

答えを見つけることは容易ではない。ただし、B系統甲bの影響があるということ考えた場合、E—bは◎のついている箇所が順番に並んでいるということ、E—bのほうが自然なかたちと言つてよいのではないだろうか。すなわちE—aが錯簡が生じたあとのかたちのように思われる。

では逆にB系統甲bが、E—bもしくはその前段階のようなものを書き写したという可能性はないのであろうか。その可能性が全くないわけではないが、歌がほぼ季節ごとに並んではいるものの、部立がなく、しかも、恋、雑の歌の区別がない家集で、「4」『聖廟御詠』が表面に出てきていない本から、B系統本に移つていく作業はかなりむずかしい。また仮にそれを行なつたとしても、なぜそのような面倒な作業をあえて行なつたのかという疑問が生じる。

流れとしては、E—bが、B系統甲bのおそらく前段階のようなものを見たというほうが自然ではないだろうか。しかし、ここでまた二つの問題にぶつかる。E—bがほぼ部立に従つて配列されていることは既に指摘した。一つ目は、B系統甲bの前段階のようなもの（これに部立があったということは、証明はできないのだが）を見たであろうE—bはなぜ部立を記さなかったのか。二つ目は、B系統甲bの前段階のようなものを見たとしても、結論から言えば、これを分解した上で、E—bが形成されたかたちになっており、それはやはり

面倒な作業なのではないかということである。言うまでもないがそのまま写したほうが速い。

四 巻頭「梅花」の歌と巻軸「きくやいかに」の歌

道真仮託家集・百首の諸本においては、巻頭・巻軸歌に特色が出ていと言つてよい。まずE系統本の巻頭歌「梅花」の歌を見てみよう。この歌の初出、出典等は確認できていないが、これまでもいろいろなところで取り上げられている。たとえば、衛藤駿氏は次のように紹介している。

「うつくしや、紅の色なる梅の花、阿呼あこが顔にもつけたくぞある」、これは菅原道真五歳、阿呼の時代、はじめて詠んだとされる有名な歌である。

歌に異同はあるが、ここでは指摘しない。衛藤氏が書いていることは、ほぼ通説となつている。荻生徂徠（一六六六—一七二八）は『南留別志』の中で、

「うつくしやべにゝもにたり梅の花あこがかほにもつけたくぞある。といふは、菅家のいとよなき時とき、よみ給ひしといふ。（中略）あことは乳母の事なり。」

（後略）

と述べ、これに対して、富士谷成章（一七三八—一七七九）は、『非南留別志』で、

「あことは乳母の事なりとは、何に出たるにか。むかしよりあこといふ詞は、吾子といふことゝるにて、卑

幼をよぶ詞なり。(中略)菅家の御詠も正しきふみにみえぬ事なれば、多くは後の人の作なるべし。

(後略)

と述べている。道真詠かどうかは疑わしいが、E系統本を編集した者は、道真が初めて作った歌ということで巻頭に置いたのかもしれない。因みにE系統本の巻頭歌は、B系統甲bでは14番歌として収録されている。では、E—bの巻軸歌「きくやいかに」の歌はどうであろうか。この歌には左注が付いている。再度神宮文庫本より引用してみよう。

此哥は北野の御りしやうなるゆへに御詠にくはへぬ

E—bの岡山大学池田家文庫本は「此哥北野」とあるが、あとは異同はない。しかしE—aの前半部分では、この歌は前半部分の最後に置かれている歌なのだが、この箇所は次のように記されている。書陵部本Aを見てみよう。

この哥は五文字北野の御りしやうなるゆへに御詠のうちにかきくはへぬ

E—aでは多少の異同が見られるのであるが、大事なことは、E—aでは「五文字」ということが記されている点である。

ではB系統甲bにおいてはどうかであろうか。この歌は、B系統甲bの構成「4」「聖廟御詠」の最後の歌538番歌である。

きくやいかにうはの空なる風たにも松に音するならひ有とは

此哥は北野の御りしやうなるゆへに御詠にくはへぬ

つまりB系統甲bの左注はE—bの左注と一致し、E—aのそれとは違うということがわかる。ここでも、B系統甲bとE—bのつながりを認めることができるのである。

E—bとE—aの前半部分との関係を整理してみよう。流れとしては、おそらくE—bからE—aの前半部分へと考えたほうが、自然かもしれない。第三節で確認したように、E—bのほうが、B系統甲bの影響をより認めることができ、左注についても、E—bがB系統甲bと共通する。つまり、形成過程としては、**B系統甲bの前段階のようなもの**→**E—b**→**E—aの前半部分**というように考えられるのではないだろうか。「きくやいかに」の歌の左注を例にして考えてみると、わかりやすいのだが、**B系統甲bの前段階のようなもの**→**E—aの前半部分**→**E—b**というのは考えにくい。

しかし、そもそもこの左注はいつたい何なのであるうか。E—b、E—aの前半部分、B系統甲b、いずれにおいても突然書かれており、詞書、歌題、左注の付いている歌があまり見られない道真仮託家集においてはやや違和感を覚える。

「きくやいかに」の歌についてももう少し見てみよう。

この出典は、「水無瀬恋十五首歌合」(建仁二年(一一二〇)九月(三日)で、次のようにある。

七十一番 寄風恋 左勝 宮内卿

141 大きくやいかにうはの空なる風だにもまつにおとす
るならひありとは

右 有家

142 うちなびく草ばにもろき露のまも涙ほしあへぬ袖
の秋風

右の秋風えんにも侍るを、左の心詞始終なほよろしく侍るにや、まさるべきよしに侍るべしこのときの判者は藤原俊成(一一一四—一二〇四)である。「大きくやいかに」の歌が高い評価を受けていることがわかる。またこの歌は他にも収録されていて、たとえば『新古今和歌集』(一一二〇五年)には、「寄風恋」という題で一―九九番歌として見える。つまり、「大きくやいかに」の歌は出典が明らかであり、道真の歌でないことも判明しているのだが、これまで見てきた左注のような記述は見られない。

ただし「大きくやいかに」の歌に関しては、堀井理恵氏が既に指摘しているように、やはり宮内卿の代表作であり、高い評価を得ており、人々の間ではかなり浸透していたのである。たとえば正徹(一一三八—一一四五九)は『正徹物語』(成立は一一四八年と一一四五〇年の二説がある)の中で、

41 戀哥は女房の歌にしみ入りて面白きはおほき也。

式子内親王の「生きてよも」「我のみしりて」などの哥は、幽玄の哥と也。俊成の女の、「みし面かげも契りしも」宮内卿が「聞くやいかに」などやうに骨髓にとをりたる哥は、通具・攝政などもおもひよりがたくやあらん。

と記している。また『小町草紙』(成立は室町時代)には、

「それ、恋路に迷ひし人は、第一に帝の御歌、第二に貫之が玉章、さては、花に結びし文もあり、(中略)珍しき初雁がねのおとづれの文もあり、上の空にも聞くやいかにと書きたる文もあり、(後略)」と見える。これ以外にも謡曲「隅田川」や狂歌集『徳和歌後万載集』等に「大きくやいかに」の歌の影響が見え、この歌が人々にいかに親しまれていたかがわかるのである。

左注は「この歌は(五文字)北野の御利益で詠んだ歌でそれゆえに御詠に加えた(御詠に書き加えた)」という内容になる。おそらく「大きくやいかに」の歌には、北野に願をかけて生まれた歌というような伝承があったのではないだろうか。そうだとすれば、次はそのような伝承を探すという作業になる。歌徳説話の類の中にあるのではないかという見当をつけてみたのであるが、残念ながら、現段階では該当するものを見つけ出すことはできていない。

では「大きくやいかに」の歌が歌集の注釈書等ではどの

ように扱われているのか、見てみよう。兼載（一四五二頃—一五一〇）の『自讃歌注』（東京大学文学部国文学研究室蔵）には次のように見える。以下「きくやいかに」の歌は省略し、注釈の部分の必要箇所のみ示す。

うはの空なる風とは心なきものたにもまつといふ文字にひかれてをとつるゝならひなるに、人の待心をもしらすして過行をなげく也、五もしおもしろし、人をかこちたる心也、此初五文字、神に祈たるなとかたりつたへたり、たしかなる説にあるらす、

初句が注目されており、「此初五文字、神に祈たるなとかたりつたへたり」の箇所は重視すべきであろう。

次に『新古今集』の古注釈書も見てみよう。『新古今拔書』（築瀬一雄氏蔵本）には「ことに第一の句めう也。」、『新古今拔書抄』（松平文庫本）には「此哥とり分第一句別なると先達申侍り。」とある。やはり初句が注目されていると言つてよいのではないだろうか。

また『新古今和歌集抄出聞書』（陽明文庫本）には次のようにある。

無心の風なれど、松といふ名あればをとづるゝ也。況、有情の人倫、心をつくしまつ事もしらずつれなきよし也。松にをとづるゝ風をば、聞やいかにと、おもふ人をおどろかす也。是も後にをく五文字也。此哥五もじを置かね、清水観音に祈精をなし、をけると也。名哥なるべし。頭注に「祈精—祈請（彰）

とある。校異 水府明德会彰考館本（略称「彰」）『かな傍注本新古今和歌集』（後藤重郎蔵本）も見てみよう。

風ハ心なし。待といふにておとづるゝ也。かやうのならひある事をしられぬかと也。此五文字いでざるを、清水へ願立時、さる人門の衆ニいかにきくやといひしを聞て、置たるといひつたへたり。

『新古今和歌集抄出聞書』と『かな傍注本新古今和歌集』においては、清水との関連で記されている。

ここまででもわかるように、特に初句に関して、話が展開していくことが見てとれる。また北村季吟（一六二四—一七〇五）が刊行した、八代集の注釈書『八代集抄』（天和二年（一六八二年）刊本）には次のように見える。

女旨云、待に松をよする事、哥の習ひ也。心なき風だにもまつといふ名を知て音づれ待に、我思ふ人の是程迄心を尽して待に、などとはぬとかこつさまなるべし。聞やいかにとある五文字、後に置たる哥也。面白き五文字也。自讃哥或抄云、此御哥合の時、講師定家朝臣五文字をよみあげ、れば、番へる人有家朝臣覚えずあと声を出せると申伝へたり。判詞にも有難きさま也と有新義同、仍略。

女旨とは細川幽斎（一五三四—一六一〇）のこと。やはり初句については「面白き五文字也」と関心を示している。「自讃哥或抄云」以下の部分は、「きくやいかに」が称賛に値する表現であることを物語っていると見え

う。

ただし、初句についていつも称賛ということではないようである。たとえば、契沖（二六四〇—一七〇一）は『河社』で次のように述べている。

新古今集、（歌は省略）

此発句を、世にめでたき事にいへど、人をことわりにいひつむるやうにて、女の歌にはことにいかにぞやあるなり。きくや君といはゞ、まさらんやと申人侍し。

拾遺集、

しるや君しらずばいかにつらからむわがかくばかりおもふころを

此初の句のたぐひなるべし。

見ずやいかに雪のしたなるおもひだにもゆればもゆるふじの烟を

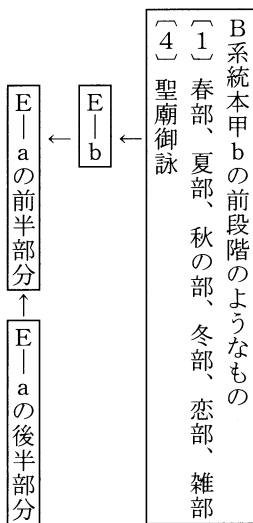
これは、うらやみてうつされたるなるべし。⁽²⁴⁾

また本居宣長（一七三〇—一八〇一）も『美濃の家づと』（板本）で、契沖の「此発句…申人侍し」の箇所を引いて、「まことにいかに少しいひ過して聞ゆる也。」と述べている。

「きくやいかに」の歌には、いろいろな伝承があると考えてよいのではないだろうか。おそらく北野に願をかけて生まれた歌というような伝承もあつたに違いない。

おわりに

道真仮託家集E系統本は、巻軸aと巻軸bを持つ本の二種類に分類できるが、両者の構成の共通部分は、巻軸aを持つ本の前半部分と巻軸bを持つ本の大部分である。両者とも道真仮託家集B系統本甲bの一部との影響関係が認められる。おそらくB系統本甲bの前段階のようなものだと思われるが、その影響は巻軸bを持つ本により強く出ている。すなわち、B系統本甲bの前段階のようなもの↓E—b↓E—aの前半部分とというような形成過程の一端が見えるのである。これを図式化すると次のようになる。



学習院大本やE—aの後半部分については今後の課題としたい。

別表 1 E系統本 E—bとE—aの錯簡箇所について

| E—b | | E—a | |
|-----|--------------------|-----|--------------------|
| 歌番号 | 初句 (179, 201は二句まで) | 歌番号 | 初句 (163, 181は二句まで) |
| 178 | よしや我 | 160 | よしや我 |
| 179 | 白雲の八重たつ方を● | 161 | かめか渚▼ |
| 180 | しら波の | 162 | 松浦かた |
| 181 | ちたひまで | 163 | しら雲の晴ぬ思を |
| 182 | 我たのむ | 164 | わすれても |
| 183 | 流れ行 | 165 | すみよしの |
| 184 | 思ひきや | 166 | するかなる |
| 185 | すかはらや | 167 | 無名には |
| 186 | 世の中は | 168 | 熊野なる |
| 187 | いひ捨る | 169 | みちのへの |
| 188 | 灯の | 170 | なげかしや |
| 189 | 都にて | 171 | 落瀧津 |
| 190 | 君と我 | 172 | いまこんと |
| 191 | 管崎や | 173 | 日をへつゝ |
| 192 | 沖なかの | 174 | みなし子に |
| 193 | 都より | 175 | しのふとは |
| 194 | さゝ波や | 176 | きるつめに |
| 195 | 北野とは | 177 | 暁の |
| 196 | 春はもえ | 178 | ねかはくは |
| 197 | つの國の | 179 | 世中を |
| 198 | 池の心○ | 180 | おもひわひ▽ |
| 199 | かめか渚▼ | 181 | しら雲のやへたつかたを● |
| 200 | 松浦かた | × | (「しら波の」の歌なし) |
| 201 | 白雲の晴ぬ思ひを | 182 | 千度まで |
| 202 | 忘れても | 183 | われたのむ |
| 203 | 住よしの | 184 | なかれゆく |
| 204 | するかなる | × | (「思ひきや」の歌なし) |
| 205 | 無名には | 185 | すかはらや |
| 206 | 熊野なる | 186 | 世中は |
| 207 | 道野部の | 187 | いひすつる |
| 208 | なげかしや | 188 | 燈の |
| 209 | 落瀧津 | 189 | 都にて |
| 210 | 今こんと | 190 | 君と我 |
| 211 | 日をへつゝ | 191 | はこさきや |
| 212 | 見なし子に | 192 | おきなかの |
| 213 | しのふとは | 193 | 都より |
| 214 | 切爪に | × | (「さゝ波や」の歌なし) |
| 215 | あかつきの | 194 | 北野とは |
| 216 | ねかはくは | 195 | 春はもえ |
| 217 | 世中を | 196 | 摂津國の |
| 218 | おもひわひ▽ | 197 | 池心○ |
| 219 | 吹風は◆ | 198 | 吹風は◆ |
| 220 | 忘るなど | 199 | わするなど |

別表2 菅原道真仮託家集E系統本（E—b・E—a）とB系統本（甲b）

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|---|----|----|----|----|----|----|----|----|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| E—b | 春 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 |
| E—a | | 1 | 2 | × | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 |
| B系統甲b | | 14 | 15 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 35 | 5 | 44 | 30 | 31 | 45 | 6 | 34 | 3 | 32 | 46 | 67 |
| 甲bにおいて連続 | | ※ | ※ | ※ | ※ | ※ | ※ | ※ | | | | | ※ | ※ | | | | | | |
| 甲b〔4〕「聖廟御詠」 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 甲bにおける部立 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-----|-----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| E—b | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 |
| E—a | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | × | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 |
| B系統甲b | 248 | 508 | 16 | 17 | 27 | *7 | 47 | 48 | 509 | 510 | 29 | 33 | 37 | 49 | 50 | 18 | × | 10 | 24 | 1 |
| 甲bにおいて連続 | | | ※ | ※ | | | ※ | ※ | ※ | ※ | | | | ※ | ※ | | | | | |
| 甲b〔4〕「聖廟御詠」 | | ◎ | | | | | | | ◎ | ◎ | | | | | | | | | | |
| 甲bにおける部立 | ▲冬 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|----|----|----|----|-----|---|-----|-----|-----|-----|-----|-----|---|-----|-----|-----|-----|-----|
| E—b | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 夏 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 秋 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 |
| E—a | 38 | × | 39 | 40 | 41 | | 42 | × | 44 | 43 | × | 45 | | 46 | 47 | × | 48 | 49 |
| B系統甲b | 8 | 52 | 22 | 2 | *26 | | 117 | 112 | 124 | 118 | 176 | 123 | | 186 | 196 | 259 | 162 | 197 |
| 甲bにおいて連続 | | | | | | | | | | | | | | | | | ※ | |
| 甲b〔4〕「聖廟御詠」 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 甲bにおける部立 | | | | | | | | | | | | ▲秋 | | | | | ▲冬 | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|---------------------------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| E—b | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 |
| E—a | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | × | 60 | 61 | 62 | × | 63 | × | 64 | 65 | × |
| B系統甲b | 198 | 199 | 195 | 164 | 156 | 168 | ⁵¹¹ ₍₅₃₉₎ | 169 | 200 | 201 | 202 | 154 | 315 | 157 | 180 | 163 | 160 | 159 | 158 | *158 |
| 甲bにおいて連続 | ※ | ※ | | | | | | | | | ※ | ※ | ※ | | | | | | ※ | ※ |
| 甲b〔4〕「聖廟御詠」 | | | | | | | ◎ | | | | | | | | | | | | | |
| 甲bにおける部立 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ▲雑 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| E—b | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 |
| E—a | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | × | 73 | × | 74 | 75 | 76 | 77 | × | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 |
| B系統甲b | 203 | 208 | 512 | 172 | 205 | 206 | 170 | 179 | 178 | 207 | 161 | 182 | 140 | 141 | 142 | 143 | 144 | 145 | 146 | 148 |
| 甲bにおいて連続 | | | | | ※ | ※ | | | | | | | ※ | ※ | ※ | ※ | ※ | ※ | ※ | ※ |
| 甲b〔4〕「聖廟御詠」 | | | ◎ | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 甲bにおける部立 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|---|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|---|
| E—b | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 | 101 | 102 | 103 | 104 | 105 | 106 | 冬 | 107 | 108 | 109 | 110 | 111 | 112 | 113 | |
| E—a | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | | 94 | 95 | 98 | 96 | 97 | 100 | 101 | |
| B系統甲b | 149 | 153 | 147 | 150 | 151 | 513 | 211 | 152 | 165 | 166 | 167 | | 514 | 249 | 260 | 250 | 261 | 262 | 263 | |
| 甲bにおいて連続 | ※ | | | ※ | ※ | | | | ※ | ※ | ※ | | | | | | | ※ | ※ | ※ |
| 甲b〔4〕「聖廟御詠」 | | | | | | ◎ | | | | | | | ◎ | | | | | | | |
| 甲bにおける部立 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

| | | |
|--------------|---|---|
| E—b | 雑 | 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 |
| E—a | | 102 103 104 105 106 108 107 109 110 111 112 113 114 205 115 116 117 118 119 |
| B系統甲 b | | 515 412 322 252 335 406 340 407 405 316 317 516 351 410 314 517 518 403 302 |
| 甲 bにおいて連続 | | ※ ※ ※ ※ |
| 甲 b〔4〕「聖廟御詠」 | ◎ | ◎ ◎ ◎ ◎ |
| 甲 bにおける部立 | | ▲冬 ▲恋 |

| | | |
|--------------|--|---|
| E—b | | 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 |
| E—a | | 120 121 122 × 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 × × 133 134 135 136 |
| B系統甲 b | | 323 318 210 401 402 283 × 400 404 320 520 521 522 284 398 324 399 395 418 290 |
| 甲 bにおいて連続 | | ※ ※ ※ ※ ※ |
| 甲 b〔4〕「聖廟御詠」 | | ◎ ◎ ◎ |
| 甲 bにおける部立 | | ▲秋 ▲恋 ▲恋 ▲恋 |

| | | |
|--------------|---|---|
| E—b | | 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 |
| E—a | | × 137 138 139 140 141 142 × 143 144 145 146 147 × 148 149 150 151 152 153 |
| B系統甲 b | | 523 291 396 397 393 409 524 525 394 526 390 355 363 441 367 ⁴⁴⁰ ₍₅₅₇₎ 358 391 387 388 |
| 甲 bにおいて連続 | | ※ ※ ※ ※ ※ ※ |
| 甲 b〔4〕「聖廟御詠」 | ◎ | ◎ ◎ ◎ |
| 甲 bにおける部立 | | ▲恋 |

| | | |
|--------------|--|---|
| E—b | | 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 |
| E—a | | 154 155 157 158 159 160 181 × 182 183 184 × 185 186 187 188 189 190 191 192 |
| B系統甲 b | | 296 350 389 292 348 293 380 433 527 × 319 327 528 381 289 529 344 294 382 530 |
| 甲 bにおいて連続 | | ※ |
| 甲 b〔4〕「聖廟御詠」 | | ◎ ◎ ◎ ◎ |
| 甲 bにおける部立 | | ▲恋 ▲恋 ▲恋 ▲恋 ▲恋 |

| | | |
|--------------|---|---|
| E—b | | 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 |
| E—a | | 193 × 194 195 196 197 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 |
| B系統甲 b | | 531 383 338 413 419 532 533 337 333 385 386 299 408 300 × 375 376 301 349 362 |
| 甲 bにおいて連続 | | ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ |
| 甲 b〔4〕「聖廟御詠」 | ◎ | ◎ ◎ |
| 甲 bにおける部立 | | ▲恋 ▲恋 ▲恋 |

| | | |
|--------------|--|---|
| E—b | | 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 |
| E—a | | 175 176 177 178 179 180 198 199 × 200 201 202 × 203 204 207 |
| B系統甲 b | | 288 417 377 378 379 534 384 329 535 536 537 374 435 298 373 538 |
| 甲 bにおいて連続 | | ※ ※ ※ ※ ※ ※ |
| 甲 b〔4〕「聖廟御詠」 | | ◎ ◎ ◎ ◎ |
| 甲 bにおける部立 | | ▲恋 ▲恋 |

〔注〕

- (1) 武井和人氏『中世和歌の文献学的研究』(平成元年七月、笠間書院)「第5章 菅原道真仮託家集・百首研究序説」(四六三—五一六頁)「第6章 附載翻刻資料—道真家集・百首」(五一七—六一七頁)。
- (2) 武井氏、前掲書、四八二—四八三頁。
- (3) 引用する本の基準については、ここでは歌数が多いということを重視している。E—aは歌数が37首のものが5本、E—bは歌数が228首のものが2本である。E—a間、E—b間において、歌についてはあまり違いはないので、最初に挙げたものから引用しているが、E—aの場合、陽明文庫本については複写が許可されていないため、書陵部本Aから引用した。
- (4) 学習院大本の歌数については、奥書との関連もあり、問題があるが、別の機会に論じたいと考えている。
- (5) 拙稿「菅原道真仮託家集」B系統本の分類再考」(『国文学攷』第二〇六号、平成二二年六月)。
- (6) 河野美術館蔵「聖廟御詠」についても、注(3)に記したような基準で選んでいる。
- (7) 衛藤駿氏「天神像の成立」(太宰府天満宮文化研究所編『天神絵巻 太宰府天満宮の至宝』、平成十四年九月「第三版」、太宰府天満宮、九頁)。
- (8) 荻生徂徠『南留別志』(日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第二期15、昭和四九年八月、吉川弘文館、一四頁)。
- (9) 富士谷成章『非南留別志』(日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第二期15、昭和四九年八月、吉川弘文館、一二七頁)。
- (10) 和歌の引用は『新編国歌大観』に拠る。
- (11) 「きくやいかに」の歌は、他に「若宮撰歌合」「水無瀬桜宮十五番歌合」「自讃歌」「定家十体」「続歌仙落書」「新三十六人撰」等に見える。
- (12) 堀井理恵氏「宮内卿和歌注釈断章—「水無瀬恋十五首歌合」より—」(奥田勲氏編『日本文学女性へのまなざし』、二〇〇四年九月、風間書房、三三—四九頁)。
- (13) 「正徹物語」(久保田淳氏編『岩波日本古典文学辞典』二〇〇七年二月、岩波書店)。
- (14) 「正徹物語」(久松潜一・西尾實氏校注『日本古典文学大系65』『歌論集能楽論集』、昭和三六年九月、岩波書店)、一八〇頁。
- (15) 『小町草紙』(大島建彦氏校注・訳『日本古典文学全集36』『御伽草子集』、昭和四九年九月、小学館)、一一七—一八頁。
- (16) 「隅田川」(横道萬里雄・表章氏校注『日本古典文学大系40』『謡曲集上』、昭和三五年一二月、岩波書店)、三八七頁。

(17) 『徳和歌後万載集』(杉本長重・濱田義一郎氏校注

日本古典文学大系57『川柳狂歌集』、昭和三十三年
二月、岩波書店)、三八四頁。

(18) 兼載『自讃歌注』(黒川昌亨・王淑英氏編『自讃
歌古注十種集成』、昭和六二年九月、桜楓社)、三
三六頁。

(19) 片山享氏翻刻『新古今拔書』(新古今集古注集成
の会 代表片山享氏編『新古今集古注集成中世
古注編1』、一九九七年二月、笠間書院)、八九頁。
(20) 片山享氏翻刻『新古今拔書抄』(新古今集古注集
成の会 代表片山享氏編『新古今集古注集成中
世古注編1』、一九九七年二月、笠間書院)、一
七頁。

(21) 黒川昌亨氏翻刻『新古今和歌集抄出聞書』(新古
今集古注集成の会 代表片山享氏編『新古今集
古注集成中世古注編2』、一九九七年二月、笠間
書院)、九〇頁。

(22) 後藤重郎・高橋万希子・村井俊司氏翻刻『かな傍
注本新古今和歌集』(新古今集古注集成の会 代
表片山享氏編『新古今集古注集成中世古注編3』、
一九九七年二月、笠間書院)、一六八頁。

(23) 藤平泉・安井重雄・蒲原義明氏翻刻『八代集抄』
(新古今集古注集成の会 代表片山享氏編『新古
今集古注集成近世旧注編3』、二〇〇〇年二月、
笠間書院)、三一一頁。

(24) 『河社』(日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』
第二期13、昭和四九年七月、吉川弘文館)、一七
一頁。

(25) 石川泰水氏翻刻『美濃の家づと』(新古今集古注
集成の会 代表片山享氏編『新古今集古注集成
近世新注編1』、二〇〇四年六月、笠間書院)、三
一六頁。

(付記) 菅田耕一先生には島根大学在学中より懇切な
指導を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。
(広島大学大学院博士課程後期在学)